

『冷戦とクラシック』

2017年08月05日

9・11同時多発テロが起こった後、坂本龍一氏が「音楽は平和に貢献できるのだろうか」と悲観的に書いているのを読んだ記憶がある。レニングラード攻防戦は900日に及び、100万人近い人々が銃弾で倒れ、また餓死した。その包囲網の中で、市民たちはしばしばコンサートを開き希望を与えられ、ショスタコーヴィチは『レニングラード交響曲』と言われる『交響曲7番』を作曲していた。この事実を知った時、音楽の持つ物凄い力に感動した。

中川右介氏が著した『冷戦とクラシック 音楽家たちの知られざる闘い』を読み、音楽家たちの平和への激しい闘いがあることを改めて知らされた。「帯」には「指揮棒を手にした『戦士』たちの物語」と書かれている。音楽で人々の心を魅了する人々だから、研ぎ澄まされた感性の持ち主で、平和への思いも人一倍であろうことは当然と言えよう。第二次世界大戦が終わった1945年から1990年までの米ソ冷戦時代、世界をリードした音楽家たちの苦闘が克明に描かれている。ソ連とソ連に支配された東欧諸国では、共産主義イデオロギーで、音楽も極めて不自由な理解がされていた。

中川氏は、バーンスタインとムラヴィンスキーの2人を中心人物としているが、ショスタコーヴィチも中心人物の一人に加え、ショスタコーヴィチの音楽についてもしばしば書いている。バーンスタインは米国人で、クラシックだけでなく、『ウエストサイドストーリー』などのミュージカルも書いた著名な人である。彼は1983年8月25日の自分の65歳の誕生日に、「核軍縮は、世界が抱える問題として、これまでで最も致命的、最も長期的な問題であり、こうした世界の自殺行為を解決することに、私は真剣に取り組みます」とスピーチした。広島での記者会見では、反核運動が原水協と原水禁に分裂していることを、齒に衣着せぬ言葉で批判した。また、米国のテレビのインタビューで、「戦争は不要であり、核兵器などというナンセンスなものは全てきっぱりと廃棄すべきであるという賢明な認識を、このコンサートによって少しでも広げることができればと思っている」と反戦、平和を真っ直ぐに訴えている。

ムラヴィンスキーは終戦をレニングラードで迎えた。そして、レニングラード・管弦楽団の指揮者として名声を得、ソ連当局の圧力に屈しない堂々たる立場を確立した。亡命を警戒するソ連は妻と一緒に外国に行くことを認めなかったが、ムラヴィンスキーは妻との同行を認めさせ、米国に演奏旅行に行った。この時、米国のケネディは、ソ連のフルシチョフがキューバにミサイルを持ち込むことを阻止するため海上封鎖をした。核戦争が起こる一触即発の危機であった。フルシチョフが「ミサイル撤去」を発表したのが1962年10月28日であった。この日の夜、ムラヴィンスキーとレニングラード・管弦楽団は首都ワシントンでショスタコーヴィチの交響曲とチャイコフスキーの第5番を演奏した。第3次世界大戦を回避できた日に、ロシア革命を描いた曲をソ連のオーケストラが演奏した訳である。会場は満席で、盛大な拍手が送られた。中川氏は、ケネディとフルシチョフの二人がその後も指導者であれば、冷戦も早く終わり、核兵器も廃絶されたのではないかと書いている。ショスタコーヴィチとレニングラード・管弦楽団が来日した。この時、二人の楽団員が亡命した。急遽、日本人の演奏家を代役にしてコンサートは無事に終わった。帰国した時、「あなたのオーケストラから逃げたことをどう説明するのだ」と詰問された。彼は、「彼らは私のオーケストラから逃げたのではない。この国から、あなた方の政府から逃げたのだ」と平然と答えたと言う。時代に翻弄された音楽家たちの闘いは多様である。